

「さくらサイエンスプラン」(SSP)で 取り込むアジアの活力

世界を席卷するカレー・パワー



東京大学を訪問後、安田講堂前で記念撮影
(「さくらサイエンスプラン」で来日したインド人高校生たち)

国立研究開発法人 科学技術振興機構
インド代表 **西川裕治**

グローバルに活躍するインド人

ご存じの通りインドは数学や物理などに強く、特にITの分野で活躍する人材が多い。古くはゼロの概念の発見や、1930年のチャンドラセカール・ラマン氏による、白人以外では初のノーベル賞(物理学)の受賞は有名だ。

最近ではグローバル企業の経営幹部にインド出身者が珍しくない。マイクロソフトのサトヤ・ナデラ CEO、グーグルのスンダー・ピチャイ CEO などが有名だが、日本でもソフトバンクがニケシュ・アローラ氏に165億円払って迎え入れたことは衝撃的だった。もはやIT業界はインド人なくして成立しないとまでいわれている。

他にもドイツ銀行のアンシュ・ジェイン前共同CEO、マスターカードのアジェイ・バンガ CEO など金融機関にもインド出身者が多い。さらにはインド準備銀行のラグラム・ラジャン総裁はIMF(国際通貨基金)のチーフエコノミストでシカゴ大学教授を歴任した世界的な経済学者。ハーバード・ビジネススクールの学長ニティン・ノーリア氏もインド出身者。鉄鋼業界の風雲児ラクシュミ・ミッタル氏も、マッキンゼー元代表のラジャト・グプタ氏もインド人あるいはインド出身だ。

これまでは頑張ったニッポン人

日本人も負けてはいない。戦後の日本は目覚しい復興を経験し、1968年には米国に続いて世界

第2位の経済大国になった。79年にはハーバード大学エズラ・ボーゲル教授の『ジャパン・アズ・ナンバーワン』が注目を浴びた。科学技術力の指標の1つとしてノーベル賞がある。日本人が初めて受賞したのは戦後間もない49年で、湯川秀樹博士が日本国民に大いに自信を与えた。

2015年現在で、日本は欧米諸国以外では最も多い24人の受賞者を輩出している。2000年以降では、自然科学賞部門で日本は米国に続いて世界第2位の受賞者数を誇る。ちなみに、このような日本の科学技術研究者を支援するのも科学技術振興機構(JST)の重要な仕事である(PR)。

しかし、生活の豊かさによる青少年のハングリー精神の減退や少子高齢化が進行する日本において、これまで通り順調な科学技術の進歩が継続できるのだろうか。急速に進むグローバル化の流れは、容赦なく科学技術の世界にも押し寄せている。そこで近年発展が目覚ましいアジア諸国、特にインドとの連携がますます重要となってきている。

欧米しか視野にないインド人

インドの多くの若者は日本よりも米国を筆頭とする欧米を見ている。一例だが、インド人の海外留学先は米国が他を圧倒している。日本に留学しているインド人の数は727人(14年度日本学生支援機構調査)だが、米国には約13万人も留学している。727人という数字はネパール(1万448人)やスリランカ(1412人)の数をはるかに